

武士の登場

執筆・講師
本郷和人

学習のねらい

平安時代の中ごろから、馬を巧みに乗りこなし、弓矢を操る技術を有した武士が登場する。彼らは国衙と交渉して自分の土地を切り開いていった開発領主・在地領主でもあった。彼らは何のために武装したのだろうか。また彼らはどのような生活をしていただろうか。具体的に見ていくことにしよう。

武士の誕生

律令のもとでは、「公地公民」が大原則とされ、基本的に土地の私有は禁じられていた。けれども、墾田永年私財法などが出され、少しずつ土地を私有することが認められていった。このとき、地方の有力者のうちで、その国を治める役所である国衙（今の県庁にあたる。その責任者を国司という）と交渉して、荒地を開墾する者が現れた。彼らを開発領主といい、開発領主の権利を引き継いだ子孫たちを在地領主と呼んだ。

平安時代、国衙はその管轄する土地をしっかりと治める力を持たなかった。そうすると、力の強い者が自分勝手な行動をするようになっていく。具体的には力に任せて、近くの土地を奪うような行動に出たのである。国衙はこうした乱暴を働く者を裁けないし、管理することができない。そのため、自分の権利は自分で守る、「自力救済」が必要になっていく。他人の侵略から自分の土地を守る。そのために鎧兜に身を包み、戦う技術を磨く。そうして地方の領主は戦う人、「武士」になっていった。

武士団の起こり

戦うときに大きな役割を果たしたのは、何と言っても「数の力」だった。多くの兵を率いていた者が勝つ。それが弱肉強食の社会のあり方だった。それゆえに武士たちは、他人の領地を侵略するにせよ、自分の土地を守るためにせよ、より多くの兵を養う必要に迫られていった。

武士が自分の命令を聞く「従者」=家来にしたのは、まずは血縁者だった。兄弟や一族など、武士の家の当主と血のつながった者が武士の家来になっていった。また地縁も大切だった。有力な武士は、自らの力をたのんで、周辺の武士たちを自分の家来にしていった。こうして形成されたのが、「武士団」だった。

通常の武士団であるならば、まず武士団のリーダーである主人がいて、その下には主人と深い関係を持つ「家子、郎党」がいた。彼らは血縁者であることが多かったようだ。さらにその下には「所従、従者」と呼ばれるような武士がいた。彼らは主人とは地縁でつながっていることがしばしばだったようだ。武士団は利益を賭けて戦い、勝者が敗者を飲み込むことにより、より大きく強力な武士団を形成していった。

清和源氏と桓武平氏

こうした武士団の中で特に有力になったのが、清和源氏と桓武平氏だった。関東の荒野にまず登場したのが桓武平氏であった。彼らは「開発領主」として広大な土地を開墾していく。こうして大きな規模をもち開発領主を「私営田領主」とも呼ぶ。桓武平氏は一族内で激しく争い、その中から平将門が現れ、朝廷に対して反乱を起こした。けれどもそれは、他の在地領主によって滅ぼされてしまう。平氏はやがて伊勢国に本拠を移し、伊勢平氏となる。彼らは院政を行う上皇と結びついて、大きな力を持つようになっていく。

平氏が退場したあとに関東で活躍したのが清和源氏だった。源頼義・義家の親子は、関東の武士を率いて、東北の在地勢力と激しく戦った。これが前九年合戦・後三年合戦と呼ばれる争乱であった。源氏はこのように関東の各地で勢力を固めたのだが、義家の子どもや孫の時代にはふるわず、各国の国司を歴任するようになった平氏に大きく水をあけられてしまった。